

スタンダール全集

3

リュシアン・ルーヴェン

桑原武夫 生島遼一 編集

スタンダード全集

3

リュシアン・ルーヴェン

I



人文書院

Oeuvres
complètes
de
Stendhal

Tome 3

Lucien Leuwen

1969年2月25日発行

編集者——桑原武夫 生島遼一

発行者——渡辺睦久

発行所——人文書院

精度是中央局内仏光寺通高倉西 TEL代表(075)351—3343

印刷——共同印刷株式会社

製本——坂井製本所

定価820円

『リュシアン・ルーヴェン』について——生島遼一

1 執筆の動機と経過

『赤と黒』『リュシアン・ルーヴェン』『バルムの僧院』をわれわれはスタンダールの三大小説と称している。このうち第二の『リュシアン・ルーヴェン』は量的にも他の二作をしのぐ大作であり、ほぼ完成したかたちの原稿がのこされているが、未完成作品である。

スタンダールは『赤と黒』出版後、この小説にたいする世評をそうとう気にしていたらしいことは、当時の書簡に照らして明瞭だ。彼は『赤と黒』におおむね無理解をしめた当時の職業的批評をそれほど気にかけている様子は見えないのだが、とにかく、彼自身の問題として、小説技術の問題を、そうとう真剣に反省しようとしている態度がうかがわれる。知人にあてた手紙のなかで批評を乞うているのが頻繁に見られるのである。一例として一八三五年九月二十七日、Albert Stapfer にあてた手紙の一節を引いてみよう（このときには『リュシアン・ルーヴェン』の原稿はほぼ書きあげられ、修正をしていた）。

「私は八折本二巻の『緑の獵人』*Le Chasseur vert*（『リュシアン・ルーヴェン』の別題名）という小説を書いています。あなたは『赤』を読んでもくれましたか？ 勇気を出して、あなたの見られたすべての欠点を正確に言ってくれませんか。私は『緑の獵人』のなかではそういう欠点を避けるように

努力しましゅう……」(『ディヴァン本全集『書簡』九卷、p. 292—293)。

一八三〇年代といえは、バルザックの代表的小説がつきつぎに現われ、また同時代作家が多数の小説を書きはじめた時期であるから、スタンダールも自然このような方法的反省にさそわれたと見るべきであらうか。『リュシアン・ルーヴェン』の直前に書きはじめ間もなく中断した小説『社会的地位』の原稿に記されたノートを調べても、すでに同様のことが感じられる。ここで連想されるのは彼が二十歳代で戯曲作家を志していたときにさかんに試みていた方法的探求のことだ。『*Filosofia nova*』と題した一群のノートのなかでしきりに試みていたことが、対象は演劇から小説に転移しつつ、復活したという印象をわれわれはうける。

『リュシアン・ルーヴェン』執筆の経過を簡単にふりかえってみよう。一八三〇年『赤と黒』出版と同時に、スタンダールは領事の職をえて任地トリエステに向かうが、途中変更されてチヴィタ・ヴェッキアに赴任し、以後一八四一年バリに帰省中病死するまで、法王領のこのわびしい漁港にいたことは周知のとおりである。《汽船に石炭がいるように毎日三、四立方フィートの新しい思想を必要とする》。彼にとって、この僻地の役人生活は退屈きわまりないものだった。《退屈で死にそうだ》(ennuyeux comme la peste) (Je crève d'ennui) といったう、つた、えがこの期の書簡に充滿している。とくに彼が心をゆるしているディ・フィオレとかソフィ・デュヴォーセルにあてた手紙にそういう、つた、えがつよく出ている。退屈をまぎらすためにしばしばローマに出て知人を訪ね、古美術品発掘に熱意をしめし、餌に行ったりする。が、とくに書く情熱がふたたび湧きあがるのだ。《人間らしい仕事は縫取りをした領事服をきることより、粗末な屋根裏部屋で小説を書くことです》。イタリア古文記録写本を入手し、《イタリア小説》を書く準備をし、また『ユダヤ人』『サン・フランチェスコ・ア・リパ』といった短篇小説を書き、一方では五十歳に近づいたスタンダールが自己の真の姿をつきとめようとする試み、『エゴチスムの回想』のような自伝作品にとりかかるなど、活発な執筆生

活がこの退屈をバネとしてはじまるのである。

一八三二年、『社会的地位』*Une Position sociale*を開始した。これは『赤と黒』以来はじめて執筆する大作小説になる予定のものだったらしいが、冒頭三章を書いただけで中絶した。ローマ大使館につとめるフランス外交官ロアザンと信仰にこって地獄の妄想に悩まされる美しい大使夫人のあいだに進展する恋愛のプロセスを描こうとしたものだが、ロアザンの自画像的性格の素描に注目すべきものがあるけれども、主要テーマとしては『危険な関係』のラクロの影響をうけた作者が若いころからたびたび発想する方法論的誘惑のそれで、スタンダール小説らしき奥行きや発展性がこれだけでは感じられず、挫折した主な理由もこのテーマの採り方にあったと推測できる。

しかし、この未完小説の原稿とともにのこされた覚書風の短いノートには、はなはだ興味ぶかい意味がある。

《事実を発案 (inventer) すること、そして美しい発展 (beaux développements) を見ること。

〔これは〕ドミニック(スタンダールは自分のことをこう呼ぶ)の相反する二つの動き。彼は九月に発案し、一月にそれを忘れた。こうして物語を何か古い本から盗みでもしたかのように詳細を描くことができる》。

《小説は、それでは、『赤』のように二人の人物の対決 (duel) であろうか？ 否。対決の話がおわったら、背景 (tableau) の多くの人物をつくること》。

《昨日再読した Dalgheuty 大尉(これはスコットの小説の人物)のような滑稽な人物がぜひ必要である。一八三三年六月》。

《文体 (三二年九月三十日) 》。『赤』よりもっと多くのリズムを入れねばならない。耳によく理解しやすいように……》。

これらの小ノートは、『リュシアン・ルーヴェン』の原稿ノートをすでに予告するものとして注意して読まねばならない。

一八三三年休暇をえて帰国したスタンダールは、九月十一日から十二月までパリに滞在する。このとき親しいジュール・ゴーチエ(Jules Gauthier)夫人から、小説原稿をうけとり、批評をもとめられた。《私はこの一包みの原稿をもって帰り、読みましょう。手紙を書いて、一月か二月に全部返送します》(J'emporterai le rouleau, je lirai, j'écrirai et vous renverrai le tout en janvier ou en février (三三年十月十一日。Corr. VIII, 133))。この原稿をチヴィタ・ヴェッキアにもちかえり、翌年五月四日にゴーチエ夫人に約束の手紙を書く。夫人の小説『中尉』を読んだ感想・批評を書きおくっているが、これまた当時のスタンダールの小説技術にかんする意見を見るうえに恰好な参考資料だから、すこし長いが要点を引用しよう。

《『中尉』読みました。あなたはあれをドイツの作品を訳すというつもりで、全部書きなおされることが必要です。私の考えでは、用語がひどく上品すぎ、誇張的です。私はひどく訂正しました。怠けちゃいけない。あなたは売文の徒でなく、楽しみに書かれるのだから。第二冊目のおわりはすっかり対話におきかえること。ヴェルサイユ、エレーヌ、ソフィー、社交界の喜劇——これらは物語(roman)では重苦しすぎる。結末は平凡です。オリヴィエはいかにも大きな財産を目あてに行動する態度です。これは現実ではけっこうなことだ。見る人が「あいつの家でご馳走になろう」と思うから。しかし、本で読むと、いやらしい感じです。私は別の結末を暗示しました。このとおり、約束どおり、無遠慮に批評しました。

人名に *pe* が多すぎます。あなたの人物を洗礼名でしめさぬようになさい。クロゼ(人 *Louis Crozet*)のことを話しつつ、あなたはルイといえますか。クロゼというでしょう。そうすべきです。各章にすくなくとも五十ばかりの最上級の形容語を消すこと。《オリヴィエのエレーヌにいだく焼くような情

熱」とはけっして言わないこと。あわれな小説家は焼くような情熱を信じさせるよう努力すべきだが、そう言うてはいけない。羞恥に反します。

金持のあいだでは傷つけられた虚栄心以外には情熱は存在せぬことを考えなさい。

彼を焼くような情熱などというと、あなたはビゴローが出版する小間使むきの小説に陥ります。しかし、小間使むきになるためには『中尉』にはビゴロー書店の小説にかならず盛りこまれる死体や事件その他のことが欠けています。』

なお、スタンダールはこの小説に『ルーヴェン (Louvain)、または理工科大学を放校された学生』という題名をすすめている。そしてゴーチエ夫人に『マリアンヌ』やメリメの『シャルル九世年代記』を、田舎好みの大袈裟な表現を治療する丸薬のつもりで読むように忠告し、彼自身のつねに採用するつぎの重要な創作法をとるように助言している——『一人の男、一人の女、ある場所を描述するとき、いつも現実のある人、ある物を念頭においてすること』。

この批評を送った直後、その翌日五月五日から、スタンダールは『リュシアン・ルーヴェン』執筆を開始した。ゴーチエ夫人の小説原稿が発見されていない今日、推定にとどまるが、スタンダールが新しい小説を書くためにこの原稿を利用したことは、彼自身ののこしたノート『*«make un opus:»* (これから一つの作品をつくること……)』から見ても明らかである。第一部ナンシーのリュシアンの生活はほぼこの『中尉』を利用して書かれたと推定される。もともとシャンピオン版校訂者アンリ・ドブレ (Henri Debray) が指摘したように、地方連隊に入った青年士官の物語ということでは、スタンダール自身、これにさきだち、『ラシーヌとシェークスピアⅡ』のなかで、つぎのような文章を書いているのだ。

「こうして、魂の繊細さを天からさずかった一青年が、偶然に少尉に任官し、隊の駐屯地でさまざまな女性と交際し、仲間たちがしきりにもっているのを見て、自分は恋には無感覚な人間だと信じこむ。一日、偶然が彼を一人の単純で、素直で、愛される値打のある女に出会わせ、彼は自分にも心が

あることを感じる。

『リュシアン・ルーヴェン』の最初のところをこれ以上にうまく要約することは不可能であろう。こうして、開始から翌三五年五月に中断擱筆するまでの一年間、この小説の創作に専念した。スタンダールはこの作品のためにはずいぶん多くのプランを書いている。筋のためのプラン、人物性格のためのメモ類、いろいろとある。つぎにかかげる全体的構想プランは、一八三五年二月十日のもので、このころほぼ内容 (*les masses*) が不動のものとなったことが推定できる――。

《第一巻――もっとも富裕な人たちのあいだでの地方生活。彼らは憎み、恐れている。不幸はそこから来る。

第二巻――情熱的な恋愛。つづいて外観は理由があるように見える不和。主人公はうぬぼれの少ない人間だから、恋人に腹を立てたりしない。彼はパリに逃げる。

第三巻――彼の父は彼を結婚させようと思える。大銀行家の世界でのパリ生活。議会と大臣。

第四巻――フランスの外、つまり外国で生活するフランス人たちのあいだでのもっとも貴族的で富裕な生活。》

この最後の《外国生活》の部分にはさきに書いた『社会的地位』を利用するつもりだったらしいが、この構想はのちに放棄した。同年四月三十日に現存原稿五冊分ができあがった――《これを書きはじめた一年。画布は埋まった》。その後、パリでも数回加筆を試みているが、一八三六年九月、十月の加筆を最後として、ついに未完のままのこされたのである。

今日われわれが読むこの小説は、アンリ・ドブレやアンリ・マルチノーらの学者が努力して編纂した版本なのであるが、その内容はざっとつぎのようなものだ。パリの裕福な銀行家ルーヴェン氏の一人息子リュシアンは理工学校存学中、学校が禁じた共和主義者の暴動に参加したため放校される。葉巻一本買うにさえ自分で働いたことがない人間と従兄に批評された彼は、自己の真価を試すため、

少尉に任官して、ナンシーの連隊に入った。当時この町にはルイ・フィリップ政治に敵意をいだく正統王朝派の貴族たちが集まって閉鎖的な上流社交界をつくっている。軍隊生活に失望し、パリっ子らしく田舎の生活に退屈したリュシアンは、策略をもちいてこの上流社交界に近づき、ここでもうんざりするが、そのなかの孤独な女性シャストレル夫人を恋するようになる。が、医師ボアリエという策謀家の術策にかかり、恋人が妊娠していると信じてパリに逃げ帰る。

第二部はバリ生活。父の勧告で《悪党》になる決心をし、内務大臣秘書となり、さまざまな困難な事件に遭遇して、《心ならずも》巧みに処理をする。コルチス事件、地方選挙の挿話——七月王政期の特徴的政治的逸話がここで豊富に語られ、小説化されたルボルタージュ (reportage romance) と評される場所である。それでもなお息子の将来を危惧する父ルーヴェンは自ら代議士となり、議会で皮肉な活動をして、息子に好意的でない大臣に復讐する。最後に、主人公リュシアンは自分が父の傀儡でしかなかったことに嫌悪を感じ、国外に出ようとするが、そのとき父が急死し、ルーヴェン家は破産する。

作者が別にもっていた予定プランでは、リュシアンはシャストレル夫人とバリ郊外のフォンテーヌブローで再会して、誤解がとけ結婚することになっていた。

つぎに、この小説の内容そのものを、今日これを読む者として、どういう理解のしかたをしたらいいか、スタンダールの三大小説の一つとして注目すべきいくつかの問題点を、できるだけわかりやすく検討してみよう。

2 『リュシアン・ルーヴェン』の問題点

I ヘーゲルが『詩学』で指摘したように、近代（十九世紀）小説の多くは、個人・社会のきびしい対立関係をえがくことを特徴としている。まだ完全に社会に組み入れられていず自由な詩的な魂をもつ若者が、散文的に組織された社会に登場するときに出会うさまざまな衝突や矛盾が主内容である。

スタンダールの小説もこの範疇に入る。したがって、よくいわれるように青年の教育（education）の小説のかたちをとる。ドイツの教養小説の型にも類似している。しかも、彼の小説構造はいつもこの、個人対社会の関係（le rapport individu-société）の図式をじつに鮮明に単純にしめすことで、十九世紀小説中でも目立っている。『アルマンス』『赤と黒』そしてこの『リュシアン・ルーヴェン』と、この図式はつねに変わっていない。こうした鮮明度（netteté）は何にもとづくか。スタンダールの主人公がもつ、あの非妥協精神、青年らしき潔癖さがそういう鮮明な輪廓を感じさせるのである。また、この若い心の潔癖さが、ジュリアン（『赤と黒』の主人公）やリュシアンの場合、いつも若干のドン・キホーテ的なもの（donquichottisme）を伴ってときどきは読者の微笑をさそうようにえがかれているところに、いっそう若々しい詩の魅力が発揮される。

へじつさいに、スタンダールの主人公たちはみな、本質において似ている。彼らはエトランジェ（étranger）なのだ。彼らは自己をエトランジェと感じ、自己をエトランジェとして発見する⁽¹⁾と、モリス・バルデーシュは指摘している（M・バルデーシュ『小説家スタンダール』p.263）。

たしかに、十九世紀バリの上品でおしゃれの環境にいるリュシアンが精力的な強い魂をもとうとし、地方小都市の製材所の息子のジュリアンは逆に、心ひそかに典雅な美青年へのあこがれを抱いている

ことで、互いに共通のものをもっている。しかし、彼らのエトランジェ性格には社会的な面と個人的な面とが両方注意できよう。ジュリアン・ソレルのように貧しさと社会の不平等に苦しむ《社会全体と闘う不幸な人間》の場合、その孤独はとくに社会的なものとして現われる。もっとも彼の場合も、彼が他人との差異、違和を感じるのには社会的意味以上のもの、パーソナリティーの奥深くに根ざす個人的実感であることはたびたびこの小説中に描述されているのだ。

リュシアン・ルーヴェンが自己をつねにエトランジェと感じ、他人と接触するたびにその違和感になやみ、ときには自殺の衝動にかられたりするのは、主として *personnel* な意味を深くもち、『赤と黒』よりとくにこれが強調されていることに注意しよう。富裕な銀行家の息子で、美貌で両親に愛され、有利な地位をいつも徒手で手に入れうる彼が、自己をそのように疎外されて感じるのはそのためである。スタンダールが主要人物の孤独性を強調し、その特異化をはかるために頻々と用いる特異な (*singulier, singularité*) などの修飾辞がオクターヴ (『アルマンス』) とともにリュシアン・ルーヴェンにもっとも多く冠せられている事情も、それを語っている。彼は友人コックに手きびしく評されたように、永久に《摩擦によってまだすりへらされていない小石》^(四)であり、すこし滑稽な《詩人》なのである。

II スタンダールの主人公たちはすべて、このように現実社会との違和感をつねにいだく人物であるにかかわらず、ロマン主義文学の多くの主人公のように暗く陰鬱で病的な印象をあたえないのはなぜか？ 人物性格のうえからいえばリュシアンも行動的である。現代人的意識過剰に悩みつつも、行動にのぞんで勇氣をもっている。リュシアンのように反省癖のつよい人物でも、彼の標語とするのは《勇氣があるならば、その形態などどうでもいい》(*Si j'avais du courage, qu'importe la forme du courage*) だった。平凡な言い方をすれば、リュシアン・ルーヴェンはスタンダールの主人公のな

かで、もっとも現代的な意味で知・情・意の均衡をえた人物であり、また同時に、そういう精神的要素の分裂にもっとも悩む人物でもある。スタンダールの主人公のもつ明確な描線の原因はこれらの人物が登場し、活動する舞台たる王政復古期や七月王政の社会世相が鮮明なかたちでとらえられ、描きだされていることにも起因する。ルネその他、憂鬱で夢想的なロマン主義的主人公が登場する場合、彼らの生きる場としての社会は、いつもはなはだ曖昧模稜としたかたちでしか描かれていなかったから。

III リュシアンのような富裕な家庭に生まれ、愛され、条件にめぐまれた人物を主人公にすることを、そういう各種条件にめぐまれなかった作者の心理的補償（*compensation psychologique*）として解釈するのが常識になっていた時期がある。私はいつもこれを単純すぎる説明だと考えていた。前述したごとく、現代的な主人公のエトランジュ性格の個人的な面を矢鋭につよくうちだそうとする小説家スタンダールの作爲だったと解釈している。あらゆる社会的条件にめぐまれ、みだされた人間の孤独をえがこうという——一見、安易にもとれそうだが——技術的にはジュリアンのような木挽のせがれの不幸な話を書くに劣らない。それ以上に困難な創意をいだいたのだろう、と推測する。スタンダール自身、こういう小説を書く困難さに気づいていたことはつぎの原稿ノートが証明している。《この作品には情熱は少ない（『赤と黒』と比較して）。しかし、この少ないもののデッサンは大胆で、真実で、正確で、*juste* であることを望んでいる云々。

IV 『赤と黒』で王政復古期のダイナミックな時代史を描いた作者は、この『リュシアン・ルーヴエン』でつぎに到来した七月王政期のそれを意図していた。これを書きつつ、スタンダールがバルザックの社会小説を多分に意識したことは原稿余白に記されたノート（マルジナリア）によって明瞭で

ある。『赤と黒』がとかく《抽象的》《理解したい》と批評されたことを反省して、今度はできるだけ豊富に具体的な時代史的資料をあつめ、挿話のひとつひとつをわかりやすく《語る》(raconter)ことに努めようとした。どの批評家もこの小説が七月王政期のじつに特徴的な資料に豊富であることを認めているが、結果としては、スタンダール好みの逸話蒐集的な書きかたで、時代史記述としては統合力に欠ける弱点も指摘する。小説風ルポルタージュと評したバルデーシュも、この小説とバルザック小説の差異は、デッサンと絵画のそれと判断し、バルザック小説では、《政治》は、逸話風に簡単に分解してしめしうるメカニズムのようなものでなく、もつと底にうごく国民の利害のうずまきから生じる、国家生命の脈動そのものとして把握されていること——結論として、スタンダールは新興ブルジョアジーの活発な叙事詩を感じとっていないと見ている。また、人物の描き方でも、政治の渦中にうごく大臣や知事の戯画化された像も、スタンダールが自ら《ラ・ブリュイエール式》になることを警戒しているにもかかわらず、はなはだラ・ブリュイエールの、つまりセラリスト的諷刺であることに注目している。

ピエール・ジュールダ (Pierre Jourda) の批評やアーヴィング・ハウ (Irving Howe) の指摘もだいたいこれと同様だ。前者は、リュシアン父のルーヴェン氏が株式取引所の実力者たる銀行家で、大臣たちと親しく交わり、いつも背後から援助しながら操り、そしてこのルーヴェン氏が第二部の筋のはこびを全部ひとりで動かしていくという設定は、「金」が支配したこの七月王政時代の特色をもっとも端的に正確にとらえたものとして讃辞をおくりつつ、このようなタイプの人物創造としては数年後に書かれたバルザックの『ニュシンゲン商会』の主人公のユダヤ人金融家ニュシンゲン男爵のほうがはるかに現実的であると評した。ハウは *The Politics of Survival* と題するエッセー中で《リュシアン・ルーヴェン》のような小説は、政治の次元 (political level) より下層に深く入りこんで、city の内奥を探ることのみによってあたえられる素材を必要とする。その才能があつたか否かは別として、

明らかにスタンダールにはその忍耐が欠けていた……」と言っている。確かに資本主義体制の強化とともに複雑化し、自己規制のつよくなった現代社会は、スタンダールの明晰な分析の手にあまるものがある。

V スタンダールが原稿ノートで暗示しているような意図、バルザックに比肩するような社会小説的作品を実現するつもりだったら、それは成功したとはいえない弱点が数々のこざれている。けっきょくは両作家の素質の差で、両作家固有の小説構造の差異といわねばならない。この差異は、有名なバルザックの『バルムの僧院』評論をめぐっての両者の意見対立で、いっそう明瞭にされることだ。

『リュシアン・ルーヴェン』がバルザック風の客観的小説として成功しなかったかわりに、これはスタンダールにとって、ある意味でもっとも親しい、(intime)な小説作品となってしまった(このことはのちに原稿ノートの吟味によって十分明らかにされなければならない)。主人公リュシアンは客観化においてはジュリアンに劣り、流動する潑刺さにおいてファブリスに劣るだろう。が、多くの矛盾をふくんだまま作者の自己が投入されている点で、作者の自己のもっとも深奥なものと結びついている特色が各処に発見できる。スタンダール研究者にはそのような手がかりがあたえられる。

たびたび指摘したように、主人公以外の多数の作者の身分的人物との「対話」によって重要な部分を書かれ、筋がはこばれているこの小説の特徴も、この作品の告白的(confidential)な性格を語っているものである。ジャン・プレヴォーはこれを「日記」(Journal intime)と評した。

デル・リット氏も『スタンダールの生涯』のなかで、この作品の主人公について、他の主人公と比較しつつ、つぎのように語っている。「たぶん、スタンダールが自己のもっとも多くを注入したのはこの小説の主人公であろう。ファブリス・デル・ドンゴが、彼がこうありたいと欲したものを理想化し、総合しているとすれば、リュシアンは、感情的に、そして真実に、彼が恋によって不器用に

なり臆病になり、苦痛と歓喜のうちにメチルド・デンボウスキーに愛を披歴していたときにじっさいにそうだった姿なのだ。リュシアンとシャストレル夫人のそれ以上に甘美で繊細な恋物語はほとんど存在しない」(『スタンダールの生涯』p.308)。

VI 第一部の中心になっているリュシアンとシャストレル夫人の恋愛の発展の経過はじつに繊細なニュアンスで描かれ、スタンダール小説中の白眉である。デル・リット氏の意見もそうだが、ポール・ヴァレリーがジイド宛てた書簡中でつぎのようにこの書きかたを高く評価していることは、すこし意外であり、注目にあたいる。

《ぼくが大好きな『ルーヴェン』にかんしては、ぼくは君がこれについて賞讃の言葉以外のことを言うのを禁じたいのだ……。ぼくは、スタンダールが、ちょうど自分に語るように——つまり、ぼく自身がしばしば自分に語るように——書くから、彼を愛している。そして彼は非常に理にかなっている。とにかく、スタンダールは、恋愛について書いている部分でぼくがまんできるほとんど唯一の作家なのだ。恋愛は、ペール以外のひとに書かれると、ぼくにとっては嫌わしい。ペール自身においてはこれ以上にすぐれたものはない。そして、この点においてシャストレル夫人との恋愛以上のものはない。これは完璧である。これは私の胃袋に必要な、心と肉体(簡略した表現)の——正確な混合である。

《他の作家では、二重唱はお粗末、つまり前もってわかってしまっている。美しい文句をつくるだけ……。

リュシアンは『赤と黒』より粗野でないから、私はこの作品のほうが好きだ。そして、ここにはすばらしい父ルーヴェンがいる。バルザック自身でも書けなかったような人物(ポール・ヴァレリーの手紙、ジイド宛。一八九七年四月十九日)。

私は『アルマンス』の解説中にも、重要なこととしてふれたのだが、シャストレール夫人の像は、アルマンスおよびクレリアとともにスタンダールがもつとも美しく理想化した女性系列に入るものだ（ラミエルの理想化のしかたはすこし異なっている）。さらにこれらの女性人物はみなスタンダール自身のウェルテル型の小心翼翼たる恋愛体験につよく結びつけて描かれている。オクタヴにたいするアルマンスの愛しかたも、自己の愛情を抑制することで表現されるし、シャストレール夫人のリュシアンへの愛情も同じ方法でいつもしめされる。両者ともに「天から追放された二人の天使たちが、この地上で相手を認めあつて語りあいたがつている」ものとして描かれ、その文章もほとんど同じであることを、私は『アルマンス』の解説で指摘した。

スタンダールが『リュシアン・ルーヴェン』を書きながら、自分の生涯最大の恋、十六年以前イタリアで経験したメチルド・デンボウスキーとのいきさつを始終念頭におき、その過去を再生（revivie）しながら執筆していたことは、本文と原稿に記されたノートとの対照によってじつに明らかである。たとえば第一部の二十一章の冒頭にこう書いている――

「深い暗がりのなかで、ときどきシャストレール夫人はルーヴェンの葉巻の火を見分けた。彼女はこのときルーヴェンを狂おしいほど愛していた。もし辺り一帯のこの深い静けさのなかで、窓の下に進みより低い声で何か器用で新鮮なことを話しかける才気がルーヴェンにあつたら、たとえば――

「今晩は、奥さん。私のいうことがおわかりになったしるしを、しめしてただけませんか？」とも言ったら、彼女は彼に言ったであらう――「さようなら、ルーヴェンさん」。そしてこの三語（adieu, monsieur Leuven）の言葉の調子は、もつとも欲求のつよい恋する男にも、文句のいえぬものだったろう。ルーヴェンという名を口にすることは、シャストレール夫人にとっては、最高の逸樂であつただるうのに」。

この章は、一八三四年五月十二、十三日にローマで書かれたことがノートでわかっている。このあ